

一般社団法人大学英語教育学会（JACET）中部支部 2022年度第2回定例研究会プログラム

日時：2023年3月11日（土）14時15分～18時00分

Zoom開催（参加無料・事前予約制）

参加方法：JACET中部支部ホームページ（<http://www.jacet-chubu.org/reikai.html>）より、
事前に参加申し込みをお願いします

開会挨拶 14時15分～14時20分 支部長 今井 隆夫（南山大学）

研究発表第1室

研究発表 14時20分～14時50分 司会 大瀧 綾乃（静岡大学）
発話前1分間プランニングと熟達度が、L2スピーキングの複雑さに与える影響について
広瀬 八重子（名古屋大学大学院生）

研究発表 14時55分～15時25分 司会 鎌倉 義士（愛知大学）
英語学習における自己効力感
—中級英語学習者を対象とした英語コミュニケーション自己効力感—
松家 鮎美（岐阜薬科大学）

研究発表第2室

研究発表 14時20分～14時50分 司会 柴田 直哉（名古屋外国語大学）
An action research study into learner profiles of graded reading online
Azusa Okada（広島修道大学）
Greg Rouault（広島修道大学）

研究会研究発表 15時30分～16時15分

【授業学研究会】

数理・データサイエンス・AI時代における問題解決プロセスを踏まえた多言語学習の検討
尾関 智恵（愛知工科大学）

講演 16時25分～17時55分 司会 今井 隆夫（南山大学）
英語教育と英語史研究の擦り合わせ
堀田 隆一（慶応義塾大学）

閉会挨拶 17時55分～18時00分 副支部長 安達 理恵（椋山女学園大学）

発表概要

研究発表第1室

研究発表 14時20分～14時50分

発話前1分間プランニングと熟達度が、L2スピーキングの複雑さに与える影響について

広瀬 八重子(名古屋大学大学院生)

本研究は、発話条件や熟達度が英語発話の複雑さへ及ぼす影響を明らかにするために、日本語母語大学生・大学院生 31名の発話分析を行った。モノログ・スピーキング(1分×4回)の前の1分間プランニングの有無(各2発話)と熟達度の違い(2グループ)の間の、言語的複雑さ【発話単位(AS-unit)の長さ、AS-unit中の平均節数、語彙多様性(MTLD)、名詞節、副詞節、関係詞節を伴うAS-unitの割合】について、多変量分散分析を行った。その結果、プランニング有無の間では、複雑さに有意差はなく、CEFR A2-B1グループとB2-C2グループ間では、AS-unitの長さの関係詞を伴うAS-unit割合において、熟達度が高いグループで複雑さが有意に高まる結果であった($p < .01$)。2グループともに、AS-unit中の平均節数、名詞節、副詞節を伴うAS-unit割合の平均は、プランニング無の条件の方が高く、発話前にプランニングを行うことで、that, when, becauseなどの節表現を用いずに、発話を続けようとする傾向があったと考えられる。さらに、発話の複雑さについて、節や語の使用に基づく指標だけでなく、句の特徴や統語発達の観点から分析する必要があることが示唆された。

研究発表 14時55分～15時25分

英語学習における自己効力感—中級英語学習者を対象とした英語コミュニケーション自己効力感—
松家 鮎美(岐阜薬科大学)

英語学習者の中には、英語の基礎力は備わっているものの、英語によるコミュニケーションに積極的に参加できない者もみられ、その背景の一つとして、学生の「英語コミュニケーション」に対する自己効力感の低さが指摘される。

そこで、本研究では、「英語コミュニケーション自己効力感」という概念を提唱し、その必要性とともに概念的枠組みを検討する。まずは、自己効力感に関する概念を「特異的自己効力感」と「特性的自己効力感」という視点をもとに考察する。前者は、教室内という特異的な場面で、学習者がどれだけ授業を理解できているかを測るものであり、松沼(2006)の尺度が用いられている。一方、実際の場での英語使用は、後者の「特性的自己効力感」に当たり、現在その指標はない。

この概念を明らかにし、その評価尺度を開発することにより、英語の基礎力は備わっているにもかかわらず、英語コミュニケーションに積極的に参加することができない英語学習者の状態を可視化することが可能となり、自己効力感の視点から支援のあり方を探る糸口を得ることができるようになると考える。

研究発表第2室

研究発表 14時20分～14時50分

An action research study into learner profiles of graded reading online

Azusa Okada (広島修道大学)

Greg Rouault (広島修道大学)

Many Japanese learners entering university have little experience of reading level-appropriate, graded materials. Many of these students with limited comprehension or enjoyment in reading have low levels of foreign language proficiency, low self-efficacy, and low motivation. As observed by Nuttall (1996, p.127), they read slowly, don't read much, and don't understand. This action research project aimed to capture the initial reading profiles of our first-year university students and their beliefs and attitudes after participating in an online graded reading project.

Study participants were 96 first-year, Japanese university students who were classified into three levels (1: ≤ 62 , 2: 63-71, 3: ≥ 72) according to their TOEIC Bridge test scores. Levels 1 and 2 were equivalent to CEFR Pre-A1 to A2. After the students read regularly both in class and outside the class for 15 weeks, they answered a questionnaire.

Although 60% of the students never read in English and one quarter of the students never read for fun in Japanese online with a further third reading less than 30 minutes per week, 77.1% reported reading in English and 5.2% reported reading 2-4 hours online in English weekly. About 73% felt they had the ability to read graded material at their level, 62.5% had greater motivation to continue reading outside of class, and over 55% had a better understanding of their strong points in reading in English.

Students with limited proficiency and almost no previous experience with graded readers learned how to find a book online at the right level, and a majority felt improvement in their reading skills and gained greater motivation to continue reading.

【授業学研究会】

数理・データサイエンス・AI時代における問題解決プロセスを踏まえた多言語学習の検討

尾関 智恵（愛知工科大学）

文部科学省は2019年にAI戦略の一環として、数理・データサイエンス・AI教育プログラムの必要性を示し、2020年より認定制度を開始した。デジタル時代の「読み・書き・そろばん」をあらゆる分野の人材が活用できるようになることが目的である。つまり、文系理系問わず学習場面も含めてICT技術活用や数理的分析スキルが強く求められている。

昨今AIと聞いて一般的に知られているのは、情報工学分野によって推進されてきたディープラーニングを含む機械学習のことだろう。ロボット将棋や顔面認識などが驚くべき技術として世間に広まったため、このような工学的技術のみに注目が集まったと考える。しかし、起源を辿れば「人がどのように経験や状況から知識構築に至るか」を理解し、新しい状況に適応していく方法を探ることがAI研究の本来の目的である。人の賢くなる過程を明らかにする認知科学研究の一分野の「問題解決」という領域が源流となっている。

この「人がどのように経験や状況から知識構築に至るか」という問題解決プロセスを検討するには、言語習得・異文化間コミュニケーション研究が重要な柱の一つになる。本発表では授業研究事例を示しながら、その理由について認知科学の立場からの説明を試みる。

講演概要

講演 16時25分～17時55分

英語教育と英語史研究の擦り合わせ

堀田 隆一（慶応義塾大学）

英語教育と英語史研究の接点を探る試みは、主として語源による語彙学習の分野で、また英米文学（史）教育との関わりにおいて、これまでも見られたものの、散発的で非体系的な位置づけにとどまり、本格的な関心をもたれずに現在に至る。しかし、今こそ両者の接近がこれまで以上に求められる時代ではないか。2019年より実施されている教職課程の「外国語（英語）教員コアカリキュラム」の学習目標の1つに「英語の歴史的変遷、国際共通語としての英語」が含まれている。「英語の歴史的変遷」は伝統的に英語史研究が取り組んできたテーマであり、「国際共通語としての英語」も近年の社会言語学的な知見を取り入れた英語史の得意とする分野である。

本講演は、まず理論編として英語教育と英語史研究の両者が共有していること、また協力できることが何かを探ることから始める。続いて実践編として、講演者自身が大学内外において英語（史）の研究・教育の発展と普及のために行なっているいくつかの試みを紹介する。最後に “English” という英単語を英語史の観点から掘り下げ、英語教育と英語史研究の擦り合わせのための具体的な提案を示したい。

【講師紹介】

堀田 隆一（ほったりゅういち）

グラスゴー大学英語学研究科博士課程終了（Ph.D.）。現在、慶応義塾大学文学部教授。専門は英語史・歴史言語学。主要な業績と活動は次の通り。

- ・ Hotta, Ryuichi. *The Development of the Nominal Plural Forms in Early Middle English*. Tokyo: Hituzi Syobo, 2009. (2010年日本中世英語英文学会松浪奨励賞（佳作）受賞)
- ・ 『英語史で解きほぐす英語の誤解 - 納得して英語を学ぶために』 中央大学出版部, 2011年.
- ・ 『英語の「なぜ?」に答えるはじめての英語史』 研究社, 2016年.
- ・ 「3単現の -s の問題とは何か——英語教育に寄与する英語史的視点——」『これからの英語教育——英語史研究との対話——』 家入葉子（編）, 大阪洋書, 2016年. 105-31頁.
- ・ 連載「英語指導の引き出しを増やす 英語史のソボ」『英語教育』2019年4月号～2020年3月号, 大修館書店.
- ・ 家入葉子・堀田隆一『文献学と英語史研究』開拓社, 2022年.
- ・ 連載「歴史で謎解き 英語のソボクな疑問」『中高生の基礎英語 in English』2021年4月号～現在, NHK出版.
- ・ 「hellog～英語史ブログ」 <http://user.keio.ac.jp/~rhotta/hellog/> 2009年5月1日～現在.
- ・ 「英語の語源が身につくラジオ (heldio)」(Voicy) <https://voicy.jp/channel/1950> 2021年6月2日～現在.
- ・ 井上逸兵・堀田隆一 「井上逸兵・堀田隆一英語学言語学チャンネル」(YouTube) <https://www.youtube.com/channel/UCth3mYb0Z9WsYgPQa0pxhvw> 2022年2月26日～現在.

事務局からのお知らせ

- ☆ JACET 中部支部 2023 年度支部大会は 2023 年 6 月 10 日（土）に開催します。開催形態や研究発表申し込みに関する詳細は、追って中部支部ホームページ (<http://www.jacet-chubu.org/reikai.html>) にてご案内いたします。どうぞ皆様、日ごろの研究成果をご発表いただけますようお願いいたします。



2022 年度第 2 回定例研究会(3 月 11 日)

参加申し込みサイト

<https://bit.ly/40lHy8t>

定例研究会に関するお問い合わせは、JACET 中部支部事務局までお願いします。

支部事務局：名古屋工業大学 吉川りさ研究室内

yoshikawa.lisa@nitech.ac.jp